

中国北方少数民族伝承文学概説（六）

キルギス族英雄叙事詩「マナス」(上)

高 橋 庸 一 郎

はじめに

1995年夏、カシガルからタシクルガンに入った。其の道程の途中にカラクリ湖という淡水の湖がある。海拔は約3600メートルで、あたりには樹木は殆どなく、足首ほどの草がどこまでも続く草原で牛、口バ、毛牛と呼ばれるヤクなどが放牧されており、真っ青な水を満々とたたえた湖のかなたには真っ白に雪を戴いたムスタグ峰がそそり立っていた。新疆ウイグル自治区の区都ウルムチを出発して、コルラ、クチャ、アクスト、天山南路を辿って一週間程たっていたが、ここへ来て初めてはっきりとキルギス族を名乗る若者に会ったのである。カラクリ湖はカシガルからランドクルーザーで崖沿いの岩だらけのガラガラ道を落石に脅えながら五六時間登ったところに有り、景色もよく後はもう割合に平坦な道が続くので、タシクルガンへ向かう旅人にとってちょうどよい休憩場所であった。このときも小さなトタン掛けの食堂の小屋に、ヨーロッパからの観光客とおぼしき老若男女十五六人と一緒に押し込まれて、うまいとは義理でもいえないマントウをお茶で胃の腑に流し込みながら、しばしの休息を取っていたのである。キルギス族の若者はそこへ入ってきて、手に持ったみやげ物らしいちょっとした細工物や布切れを高くかざしながら、外にまだたくさん持ってきてあるから、出て見てくれというようなそぶりをした。皆そろそろ食事も終わりかけていたし、外のいい景色といい空気に浸りたいという思いもあって、ぞろぞろと外に出てみると、小学生から中学生くらいの子供達が地面に布を

広げて、そこに色々な細工物、工芸品、ナイフ、黒くて巻き上げたようなつばをつけたキルギス帽、スカーフなどを並べて売っているのがあった。彼等は極めてしつこく、強引であった。あんまりしつこく付きまとわれて、大声で怒鳴りながら追い払う客もそこそこに見られた。一番しつこいのは先の小屋掛けに入ってきた若者であった。そもそも彼等がキルギス族であると知ったのはこの若者の歌うような売り声からであった。其の歌は「キルギスバザール何でもあるよ、キルギスバザールいいものばかり、さーさよく見て買っとくれ、決して損はさせないよ」、というような内容であったが、結構わかりやすい中国語であった。其の若者がどういうわけかわたしにばかり付いて回って離れない。仕方なくヤクか何かの骨で作ったプレスレットを一つかって、「君は何処からきたのか」と聞くと、「あっちだ」と答えて、街道の反対側を指差しながら、歩き出した。別に彼の家に行きたくはなかったが、仕方なくついていくと、街道筋からなだらかな斜面を下ったあたりに、数戸からなる集落が目についた。石ころを積んで壁にした家で、屋根はテント地の布に板や灌木の木切れなどが載せてあった。若者はどンドンと斜面を降りていこうとする。「わかった、わかった、もう僕は戻る」というと、彼はまたもや強引に「ついて来い」といって聞かない。しばらく押し問答をしてやっと解放された。食堂の小屋に帰ると、他の観光客は皆すでに出発して誰もいなくなっており、私の連れのウイグル人の青年と、同じくウイグル人の運転手の若者だけがボカンと坐っているだ

けであった。キルギス族、其れは私にとってはただただ強引でしつこい民族という印象でしかなかった。しかしここに述べようとする「マナス」への考察は、私に本当のキルギス族の姿と心意気を見せてくれるような気がする。

「マナス」とはどういうものか

「マナス」はキルギス族の間に、ほぼ千年近くに亘って伝承されてきた英雄叙事詩である。中国の北方少数民族には最も有名な叙事詩が三つあるといわれている。其れはモンゴル族の「ジャンガル」、チベット族の「カサール王伝」、其れとこのキルギス族の「マナス」である。この三つにはそれぞれの民族の特徴が非常に濃厚に表れているが、この「マナス」は其の中でも最もキルギス族の経てきた歴史と価値観に忠実に沿った伝承であると言えるであろう。「マナス」はもとより一人の人間の手になったものではない。悠久の伝承の間に改変されたり追加されたり、特に語り手によって増補されてきた跡は、他の二つの作品よりもはっきりと読み取れる。しかしこの作品がいつの時代に成立したものであるかは他のふたつ同様あまり定かではない。「マナス」の伝承範囲は、「カサール王伝」ほどではないにしても極めて広く、中国国内のキルギス人居住地区、つまり新疆ウイグル自治区のほぼ全域、キルギス共和国、アフガニスタン、にまで及ぶ。即ち中央アジア、西アジアの、キルギス人が居住するところにはすべて伝承されているという事である。このことはつまりキルギス人にとって、マナスはかけがえのない英雄であるということであり、また夢であり誇りであるという事である。

三大英雄叙事詩の一つ「ジャンガル」を伝承する専門的職能者、所謂ジャンガルチーは「ジャンガル」の全部の章を演唱できる人は残念ながら今では恐らく一人もいないであろう。「ジャンガル」の一部なら演唱できるというジャンガルチーでさえ十指に満たないであろう。また「カサール王伝」を伝承する所謂カサールチー

は、「カサール王伝」の成立の事情から考えても、もとより全章を演唱できる人は当然全く存在しないのであるが、其の一部を演唱できる人も今では五指に満たないのではあるまいか。

しかしこの「マナス」の場合は、全章を演唱できるものは少なくとも一人は居り、一部演唱できるものは1982年の調査では70名は居るという事である。この70名は今でもキルギス人の間で演唱を続けており、ということは「マナス」は今でも明らかにキルギス族の人々の間で語られ、歌われ、聞かれているということでありつまり「マナス」は今もかれらの実生活の中で生きているという事である。

「マナス」の構成

「マナス」は八部から成っている。第一部は「マナス」、第二部は「サイマイタイイ」である。マナスはキルギス族の中の最も強く勇敢で、ひたすら正義のために尽くす超人的な大英雄である。サイマイタイイはマナスの子で、マナスが極めて悲惨な死を遂げた後を受けてキルギス族のために大いに奮闘するのであるが、其の奮闘はマナスの父親が、マナスの死後、マナスの妻、マナスの財産、マナスの領土、マナスの確立したすべての支配権を篡奪しようとした事に始まる。サイマイタイイは結局其れ等すべて取り返すのであるが、其の戦いに当たっては、マナスの幻の亡霊が、戦いの最も厳しい時に現れて、サイマイタイイを助けることによって事が成就するというわけである。即ち第一部と第二部は話としてはそれぞれ独立した話になってはいるが、ちょうど鎖の輪が互いにつながっているように、内容の一部が相互に食い込んでいるのである。第三部は「サイタイク」であるが、これもマナスの子のサイマイタイイの子である。つまりマナスの孫という事に成っている。子の場合も第一部と二部がそうであったように、第二部と三部も鎖状の鉤によってつながれている。つまりサイマイタイイの家臣である勇者がサイマイタイイを裏切って其の妻を拉致監禁し

てしまうのであるが、その時すでに腹に宿していたのがサイタイクである。後に、サイタイクは自分の母親を拉致した裏切り者と、もう一人の裏切り者、つまり自分の父親であるサイマイタイイのものと勇者で、其の死後サイマイタイイの第一婦人チアキガイを娶ったカンチアオチアオを其の女とともに誅して父のあだに報いるのである。

今ここに紹介したのは、鎖のかぎの部分だけで、この他の大部分はキルギス族の利益と正義のために、侵略者や悪事を働いて人々を苦しめる妖魔等を退治する雄々しい主人公の姿が描かれているのである。

第四部で活躍するカイニエニムは第三部のサイタイクの子で、其れがこの部の題名にもなっているのである。以下第八部までマナスの子孫七代が前代の父の仇を打ちながらキルギス族のために活躍するのである。

このような、ある程度横軸的の広がりにもふくらみを持たせながら、一族の八代にも亘る家系を縦軸として英雄の系譜を構成して行くことは、先にあげた他のふたつの英雄叙事詩には見られないものであるばかりでなく、少し大げさに言えば世界的規模でかなり普遍的に見られる他の各民族の英雄物語にもあまり見られない例ではあるまいか。恐らくこれは独自の文字というものを持たず、それゆえに文字に依る記録を残す事の出来なかった民族が自分達の代々のかけがえのない歴史を「マナス」という遠大な英雄物語の中に流し込み、溶け込ませて後代に流伝していこうとした強い意志の表れと其の結果であると言えるのではなからうか。

「マナス」の演唱

ここに掲げたものは、キルギス族の有名な「マナス」演唱家、チウスホ・ママイが演唱し、其れを記録した物で、湖南人民出版社が1983年に「中国少数民族文学」と題して出版したものの中から要約したものである。ママイが記録したものは全部で八部で二十一万詩行、約二千万

字である。この「マナス」はすべて韻文であって、散文の部分は存在しない。故に語る者は、恒に節をつけて歌うのであって、所謂朗誦するのではない。更にこの場合、楽器は一切用いず、演唱者の地声だけで歌うのである。こうした点も他の二つの英雄叙事詩とは異なった特徴といえるであろう。また演唱者が地声でのみ歌う時、顔の表情はもとより、二本の手をはじめとする上半身全体を存分に使って歌いの内容を表現することができるというのも「マナス」演唱の特徴である。

この「マナス」の題名は全八部の中の第一部の名称であるが、この一部は全体八部の長さの内の四分の一を占め、内容的に言っても最も充実し、他の七部の重要な基盤となっているために、この名を以って全体の名としているのである。

「マナス」の第一部から第四部までの内容

第一部「マナス」

序詩開篇、キルギス族の族源とマナスの先祖について述べる。マナスの父親チャクブははじめ子供がなかったので是非ほしいと願っていた。当時キルギス人を支配していたカルメイック人（もと新疆・甘肅・青海に居住していた蒙古人で西蒙古人に当たる。所謂オイラート蒙古のことである）の中に有名な占い師、ランコタクが居り、彼はキルギス人の間にやがて一代の英雄マナスが生まれると予言する。カラメイックの王アラオケは其れを聞いて激怒し、手当たり次第にキルギス人の妊婦の腹を割いて調べるといふ暴拳を行ったが、多くのキルギス人に守られてマナスは生まれた。マナスは飛ぶように速く成長して怪力無双の好漢と成った。9歳で40人の勇士達を引き連れ、弱きを助け貧しきを救い、暴虐を除き、正しきを安んじ、タシクルガン・カシガル・ウルムチ・アフガンにまで遠征して、14汗王の部落と同盟を結んでキルギス人の汗王首領となった。またカニカイ公主と結婚した。攻めてきたカルメイックのコングルバ

イを打ち負かした。クタイ人（契丹人のことと言われる）のアリマンペトックと義兄弟の契りを結んで、最後にペイチン（嘗てトルファン郊外にあった北庭、つまりベシバリクのことと言われる）をうって大勝したが、其の時の気の緩みに付け込まれて、敵の毒斧を後頭部に受け、重症のままタラスに帰ってから死去した。

第二部「サイマイタイ」

マナスの死後、一人っ子のサイマイタイが残された。マナスの父及び異母兄弟たちがマナスの財産、領土、支配権を奪い取ろうと画策し、マナスの父チャクブはマナスの妻であったカニカイ夫人を自分の妻にしようとした。カニカイは子供を連れて実家に逃げ帰った。サイマイタイは成長してからタラスに戻り、母親を迫害した叔父と祖父を殺した。この時チエティカル人のタリトイが14汗王の一つ、アクン汗の城を攻めて、その娘のアイチュライカを奪っていこうとした。アイチュライカは白鳥となって城から脱出し、サイマイタイに助けを求めた。サイマイタイはタリトイを破り、アイチュライカを助けてこれと結婚した。其の後サイマイタイの勇士の一人が裏切って、サイマイタイを攻め、アイチュライカをうばってにげた。それからまもなくカルメイックのコングルが攻めてきたが、サイマイタイは仙人に身を隠す方法を習って難をまぬかれた。

第三部「サイイタイク」

サイマイタイの妻アチュライカは裏切りの勇士クアツに奪われたが、この時彼女の腹には子供が宿っており、其の子が後に、マナスから三代目の英雄サイイタイクと成ったのである。サイイタイクが生まれた後、クアツは何度もこの子を殺そうとしたが、母親のアイチュライカがたくみに守って成長した。サイマイタイの裏切り勇士カンチャオチャオはサイマイタイの第一婦人のチアキカイを娶り、汗位にのぼり、サイイタイクの祖母カニカイを牛追いとしてこき使った。またマナスの忠臣であったパカイを

ラクダ使いにし、またサイマイタイの忠誠の勇士コリチャオラオの骨を砕いて焼くなど、キルギス人は辛酸を嘗め尽くした（マナス一族の周りに集まってきていた勇士達はすべてがキルギス人ではなく、キルギス人よりも他民族の人間の方が多かったようである。例えば蒙古人、ウイグル人、ハサク人、マナスの最大の強敵であるクタイ人なども含まれていた。このあたりがこの物語の人間関係を複雑にし、またそれだけ物語の筋立ても意表をついたものとなっていて、こうしたところが「マナス」の面白さの要因の一つになっているといえる）。サイイタイクは14歳でタラスに戻り、謀叛の徒、カンチャオチャオとチアキカイを誅し、クアツを斬って父の仇に報いた。サイイタイクは女英雄クヤラと結婚した。父親のサイマイタイは身を隠したところからめでたく復活した。

第四部「カイニエニム」

サイイタイクの子カイニエニムは7歳になってもあるく事が出来なかった。まるで馬鹿のようであったが、食べ物にかけては驚くほどたくさん食べた。9歳の時知らせる人があって、アイタペク地方のアイトモク人のチンエシにはキニカイという娘があり、其の容姿は端麗この上なく、絶世の美女であった。巨人のソマイルカンが彼女に求婚して、其の父親に生きた人間を毎日一人づつ送っていた。サイマイタイは其れを聞きコリチャオラオとサイイタイクの妻クヤラをともなって助けに行ったが、却ってチンエシの魔法にかかって妖怪の住む湖に閉じ込められてしまった。女英雄サイカカラはタラスに急を告げに戻って、其処でカイニエニムは父に代わって遠征する事になった。彼は柳の大木を引っこ抜いて振り回し、敵軍を打ち払って祖父を救い出したカイニエニムは魚の神と同盟を結び、鳥神と友好関係を結び、チンエシを打ち破り、その娘キニカイを連れて勝利凱旋した。後にタラスを大風・大雨が襲った時も、蒙古人が襲ってきた時もカイニエニムは国を助け国を守ったのである。

第一部から第三部までの特徴と 第四部

以上が全体の話の大体半分である。内容から言えば、第一部から第三部までをここに掲げ第四部は第五部以下に続けて解説しておいたほうがいいかも知れないが、第三部までと、第四部以降がどういう風に違っているのかをわかり易くするために、敢えて第四部までをここに出しておいた。

まず第一部から第三部まで読んでみると、これらの内容は、いかにも現実に生きて活躍していた歴史上の英雄伝という感じではあるが、第四部になると急に物語風というか、御伽噺を読んでいるような気持ちになってくる。このあたりが、この「マナス」が第三部までが最も重要であるとして、何か事あるごとに必ず語られ、歌い継がれてきた理由であろう。しかしそれでは第四部以下はないがしろにされてきたかというところ決してそうではない。新疆大学の研究者達に拠れば、第四部以降は、比較的荒唐無稽な筋立ての物語が混入してくるために却って、其の物語性が濃厚となり、それだけ表現の面でもこまやかに、また其れが歌われる節回しも情緒的となって、聴く者を魅了する要素は寧ろこちらの方が勝っているというのである。

こうしてみると「マナス」の第一部から第三部にかけては、「カサル王伝」などの場合と違って、演唱者の即興的増補や削減などはあまり許されないように思える。其れはこの部分がそれだけ当時の歴史的状況に沿って作られており、其の状況こそがキルギス族の辿った歴史そのものであったということの意味しているからかもしれない。

しかしこのチルスホ・ママイの歌った「マナス」には、第一部の最初に書いたように「序詩開篇」の部分が有り、其れが「マナス」を語る者聴く者にとっての心構えのようなものであり、其れが極めて自由で奔放で楽しいものであるので、ここに訳出しておく。

チルスホ・ママイの口上

哎，……哎，……哎哟！

我要唱雄狮般的英雄玛纳斯；
但愿玛纳斯的灵魂保佑，
使我唱得动听而且真挚。

一半是真，一半是假，
谁也没有亲眼见到；
只求大伙听了欢乐，
是真是假，有谁去计较！

哪一半是真，哪一半是假，
谁也没有亲身经历，
只求大伙听了欢喜，
增添了多少，有谁去算计！
为了满足大伙的心愿，
请让我纵情地歌唱吧！

这是祖先留下的故事，
我不唱它怎么行呢？
这是先辈留下的遗产，
代代相传到了如今。
倘若不唱英雄的故事，
何以解除心中的苦闷？
演唱祖先留下的故事，
现在正是大好时辰！

它是我们祖先留下的语言，
它是战胜一切的英雄语言；
它是难以比拟的宏伟语言，
它是繁花似锦的隽永语言；
它是我们先辈传下来的语言，
它是后人荟萃起的精美语言；
它是象种子能够繁衍的语言，
它是让人们钦慕喜爱的语言；
它是代代相传的语言，
它是人世间最壮丽的语言；
它是不会被淹没的语言，
它是比太阳还光辉的语言，
它是比月亮还明媚的语言；

它是绵延不断、滔滔不绝的语言，
玛纳斯的故事啊，谁也唱不完。

父亲是阿达木，
母亲是阿巴，
一辈又一辈过去多少代，
从古到今经过了多少岁月年华。
骑大象的英雄消失了，
力大的壮士逝去了，
英雄玛纳斯的故事，
依然在人们心中流传。
从那个时候到现在，
高山倒塌夷为平地，
岩峰风蚀变成尘雾，
大地龟裂成了河川，
河谷干涸变成荒原，
荒滩变成了湖泊，
湖泊变成了桑田，

さーさ，皆様方，
このわたくしめ，さても我等が，雄雄しい獅
獅の如き，あの英雄マナス，其の人をこ
ここに謡わせていただきます。
ただ願わくば，マナスの魂が，このわたくし
めをお助けになり，わたくしめの謡が生
き生きと美しく，道を外れることなく，
直からんことを願うばかりでござります
る。

さてさて今より，ここにお披露目申し上げる
この話，半ばはまこと，半ばは作り事，
されど，誰も其の目で見えてきた者は居られぬ
事と思えますれば，
ただただ聴かれて，お楽しみあれ，
うそか，まことか，誰が確かめになんぞ参ら
れましょうや，
うそか，まことか，誰がその身を其の時に，
置いた者なんぞ居られましょうや，
ただただ聴かれて，お楽しみあれ，
うそとまことを交えても，誰が其れを見分け
られましょうや，

みな様方の願いのままに，このわたくしめ，
心行くまで謡わせていただきますよう
ぞ，

これこそ，我等がご先祖様の物語，
どうして謡わずにおられましょう，
これこそ，我等がご先祖様の，だいじな大事
なおん形見
さすれば，世々に相い伝え，
今日の今日まで語り来し，
もし英雄のことを謡わねば
如何にか，うさを晴らせましょう。
祖先の残した物語，
謡う今こそ，すばらしき。

われらが「マナス」
そは我等が祖先の残したことば
そは戦いの一切を勝ち抜いた英雄のことば
そは比類なき高遠成ることば
そは咲き誇る花にも似た錦のごとき深くて美
しきことば
そは我等が先人達の伝えもたらしたことば
そは後人の集めた精緻にして優美なることば
そは種のように芽を出し茂り行くことば
そは諸人に喜ばれ慕われ愛しまるることば
そは代々末永く伝え継がれ行くことば
そは人の世で最も荘厳にして麗しきことば
そは決して埋もれ沈み行く事のないことば
そは日の光よりまばゆく輝けることば
そは月満ちた月よりも皓々と明るく輝けるこ
とば
そは連綿として途切れることなく，とうとう
と流れる大河如く絶えざることば
我がマナスの物語は，誰にも謡い語り尽くす
事はできますまいて。

我等が元祖の父親は，アダムとぞ申します。
我等が元祖の母親は，アパと言う名でござり
ます。
遠い遠い昔から，今日というこの日まで
一代一代年月が，過ぎて幾代経たことが

りりしく白馬に打ちまたがった、ますらおの
姿すでに無く
怪力無双の勇者等も、とっくにこの世からは
消え去りぬ。
されど我等が英雄の、マナスの雄雄しき姿と
物語、
いま尚我等が胸中に、泉の如く湧き出づる。
遠い昔のあの時から、永きを経たる今日の日
まで、
高き山は崩れ落ち、低き窪地と成り果てぬ。
切り立つ峰には風うちて、小石と塵に成り果
てぬ。
大地は裂けて大河となり、
峡谷涸れ果て、荒野となり、
荒地は変じて海原となり
海原変じて桑畑となり、
丘は変じて谷川に
氷河は変じて湖に
森羅万象幻のごと、一つたりとて変わらざる
無し。
ところがマナスこの人の、物語のみは変わら
ずに、
太古の昔から今日まで、変わることなく一筋
に、
歌い継がれてあれましぬ。

.....
.....

（ママイ演唱「瑪納斯 第一部 上巻」
新疆人民出版社，1991年1月）

以上から見ると、世は移り、時は変わっても、
「マナス」の物語だけは変わらないと言ってい
るようであるが、実はそうではない。変わらない
のは内容ではなく、代々伝えてきたという事
実が変わらないというのである。

実は、中国の当大最も有名な少数民族三大英
雄叙事詩の研究者である郎櫻採取した、チュス
ホ・ママイの口上には次のようなものもある。
これは恐らく即興で歌った部分であろう。

人民创造出英雄，人们创造出歌手，
他们演唱《玛纳斯》，边唱边增加内容，
我承袭了别的歌手所唱的内容，
演唱中我也是边唱边编，
我将尽我所知演唱《玛纳斯》，
请各位兄长不要责怪。
以前的玛纳斯奇只唱到赛依铁克这一代，
他们没有把雄狮子孙后代的事迹
与英雄玛纳斯联系起来。
以前的玛纳斯奇，他们都有缺欠，
他们以为赛依铁克之后
柯尔克孜人民中就再也没有出现过英雄。
人民是河流，人民是海洋，
人民能创造出不朽的英雄。

人々英雄作り出し、人々謡い手作り出す。
彼等「マナス」を歌うには、足したり引いた
りお手の物、
人の謡うを聞き取って、自分の謡に色つける。
謡う中にも工夫して、あれこれ変えてやっ
てみる、
知恵の限りを搾り出し、私の「マナス」を謡
うのさ
どうかお聞きの皆々様、こんな工夫を責むな
かれ、
昔の「マナス」の謡い手は、第三部までしか
謡われず、
「マナス」の子孫の勲功は、マナスと関係付
けてはいなかった。
昔の「マナス」の謡い手は、皆知らない事ば
かり。
第三部の後までも、キルギス族の英雄が、活
躍したとはしらなんだ。
人の世の流れはまるで川のように、昼夜をおか
ず何処までも、大海に到るも果てしなし。
英雄を作る願いはいつまでも、何処へ行こう
と尽きはせぬ。

（郎櫻「中国少数民族英雄史詩、『マナス』」
浙江教育出版社，1995年3月）

（以下次号）

参考文献

- 馬学良・梁庭望・李雲忠主編『中国少数民族文学比較研究』中央民族大学出版社，1997年10月
- 馬学良・梁庭望・張公瑾主編『中国少数民族文学史』中央民族学院出版社，1992年1月
- 王堡・雷茂奎主編『新疆民族民間文学研究』新疆人民出版社，1986年1月
- 毛星主編『中国少数民族文学』湖南人民出版社，1983年7月
- 居素普・瑪瑪依，演唱『瑪納斯』新疆人民出版社，1991年1月
- 劉魁立主編，郎櫻著『瑪納斯』（中国民間文化叢書），浙江教育出版社，1995年3月

（2000年12月15日受理）